生活文化史 Seikatsu Bunkashi

＜史料館だより＞

目　次

◇史料館復旧再開に際して……杉浦　昭典　2

◇被災史料の救出と史料館……大国　正美　3

◇神戸市東灘区旧本庄村の地蔵盆について……望月　浩　6

◇『生活文化史』総目次ー創刊号～第20号ー……18

1995. 12. 10

NO.21

復旧の進む阪神高速道路神戸線（神戸市東灘区深江の史料館南側交差点、西側を望む）1995.10.29撮影 ▶

神戸深江生活文化史料館

史料館復旧再開に際して

史料館館長　杉浦昭典

この度の大震災では当史料館も相当な被害を受けました。しかし、大日神社の社殿全壊をはじめ、深江地区一帯の甚大な被災状況に比べれば、史料館の建物自体にはほとんど損傷なく、内部も調度品が倒れ、展示ケース及び展示品等の破損と史料並びに書籍類の散乱はありましたが、激震地の中にあっては、最小限の被害にとどまりました。

深江地区に居住する館員はありませんでしたが、いずれも神戸市及び阪神間の激震地にあって、中には肉親と住居を同時に失った人もあり、大なり小なり何らかの被害を受けていました。交通機関が寸断されていたため、史料館へ集まる館員も限られましたので、その時点では復旧作業も容易に進まず、この分では早くても約一年間を要するのではないかと考えられました。

それでも、館員それぞれの熱意により、積極的に館内の整理と復旧が行なわれ、当初の見込みよりも早く作業がおわり、一部応急修理のみの個所はありますが、十月二十二日(日)から再び開館することができました。

その間、蔭ながらご心配をいただき、ご声援を賜りました方も多く、また被災された数軒のお宅から史料民具多数の御寄贈をいただき、展示品として新たに加えることもできました。厚くお礼申し上げます。

なお、かねてより活動を休止し、平成七年度から新組織として再発足すべく準備を整えてきました史料館友の会につきましては、種々検討の末、史料館並びに史料館周辺の状況に鑑み、まことに残念ですが、七月一日をもって正式に解散しました。会員の皆様には個別にご連絡いたしましたが、ここに改めてご報告申し上げます。

これからも『本庄村史』完成を第一目標とし、被災地復興の一助となるべく史料館の充実とその存在意義を高めるよう、館員一同相携え努力して参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

被災史料の救出と史料館

史料館副館長　大国正美

はじめに

震度7の激震は貴い人命と財産だけでなく、多くの文化財や歴史遺産へも被害を与えた[1]。史料の救出には「非常時に何と悠長な」という声があるかもしれない。しかし歴史に学ぶ姿勢が欠落していたことが、被害をここまで大きくした一因でもあった。地震後の宮崎辰雄前神戸市長のテレビインタビューで印象的な一言がある。「地震が起きるなんて夢にも思わなかった」である。だが、四百年前に兵庫津が壊滅的な被害を受けた地震があったことは、歴史上著名な話である[2]。「四百年前なんて大昔の話をされても」と言う声があるかもしれない。しかし人の一生が八十年のライフサイクルをもっているのに、産卵後のカゲロウは数時間でこの世を去る。四百年は地震のライフサイクルであるに過ぎない。

同時に私たちの生活は、歴史的な営みの積み重ねによって育まれた社会で成り立っている。その積み重ねの記録を失うことは、足元を掘り崩されることを意味する。飢えや乾きは短期的に回復するが、文化を失った乾きは、長い間じわじわと私たちを蝕むだろう。そして歴史事実に反した「常識」の一人歩きをまた許すだろう。

地震に限らず災害はまた必ずやってくる。その日に備え、今回、被災史料を救うために、私たちが何をしたか、何ができなかったかを記録しておく必要がある。すでにいくつかの報告[3]があるが、ここでは史料館の被災史料の救出について記録に止めたい。

被災直後の状況

被災直後はほとんど救出活動をできなかったのが実状である。それは、史料館のスタッフが、社会人として本来の仕事をもっていながら、生涯学習の場として運営に関わっていて、常勤職員がいないという史料館運動の根本に起因している。またスタッフの中核の二人の自宅が全壊し両親を失ったことや、ほかのスタッフの多くが比較的遠方に居住していたり、公務員が多かったため被災者への対応を集中的に果たさなければならなかったことがある。交通が途絶したこと、当初は水道、ガスなどにも事欠き、地域とのパイプ役を期待される自治会長などまで遠方に避難したことも大きかった。

この間、地元在住の道谷卓研究員の自宅に、史料を見て欲しいという依頼がきた。日常の普及活動を通じて彼をご存じだった方で、避難所から尋ねてこられた。実見の結果、米穀関係の商売道具が主で大型民具が多く、一人では救出や運搬もままならず、救出を断念した。ほかにも民具の救出を望む被災者がいるとの情報があった。避難所生活を送りながら、いわば毎日の生活がどうなるか分からない中で、史料救出を望んだ市民がいたことは明記してよい。二月になって歴史学会が連絡会を設け、史料救出のボランティアグループである歴史資料保全情報ネットワーク（略称・史料ネット）が誕生し、尼崎市立地域研究史料館に事務局を置いた。遅れて私も参加し、彼に情報提供を依頼して、それ以前に被災者から救出の要望があったことを知った。初期の対応が遅れたことが悔やまれた。

話は前後するが、私自身は勤務する神戸新聞社の本社ビルが使用不能になり、地震当日から京都新聞社の協力で新聞を編集するため京都に出掛け、二月六日まで泊まり込んだ。昼夜の交替や休みもな

く直接の救出活動は不可能になった。このため一月下旬から、かつて共同で史料調査をしたことのある神戸市立文書館員と連絡を取りながら、既調査史料の安否確認を電話で始めた。

東神戸の既調査史料のうち、魚崎地区の酒造家で近世に庄屋を務めた家柄の松尾仁兵衛家の蔵が全壊していた。従業員では話がつかず、何度かの電話の末、ようやく面識のあった仁兵衛氏と連絡がとれた。仁兵衛氏も史料の重要性を認識され、蔵の撤去を一挙にするのではなく、蔵の屋根などを最初に取り除いて、中の物を搬出しながら撤去するよう、解体業者と交渉して下さった。当初、回収すべき文書の判断がつく研究者の立ち会いを求められ、神戸市立文書館員に連絡をとったが、結局は専用の文書収納箱に入っていたために、酒造会社の社員でも判断が可能で、無事回収できた。また母屋の二階に漢籍類がまとまってあり、こちらは神戸市立文書館員に回収を依頼した。かつて仁兵衛氏にお会いした時の印象では、歴史や史料にも関心の深い方だったが、史料の救出について行政のどの部署と相談したらよいか、ご存じなかったことが強い印象として残った。のちに被災史料の巡回調査で一層痛感することだが、民間史料の保護に行政が果たすべき役割について、行政も市民も認識を持っていない実情が改めて浮き彫りになった。一方、史料の知識がない人でも一見して分かるような専用の文書箱に古文書をいれて管理していたことが、史料の救出を容易にした。

なお、深江村庄屋や大庄屋を務めた永井正治氏の自宅は全壊したが、古文書は金庫に入っていて無事だった。電話と訪問とで確認した。また史料館自体は建物には被害はほとんどなかったが、県教育委員会から借用して展示中の深江北町遺跡の土器、特別展中の打出焼やガラスケースが破損し、書籍類は散乱した。ただ古文書類には被害はなかった。

史料の救出活動

前述したように二月にはいると、歴史学会による史料救出のボランティア活動が始まる。私も明石市の史料救出を皮切りに、打合会や救出活動に参加、一方史料館も主体的に史料救出を始めた。その最初のものとしては四月の本山北町の小林存氏邸がある。これは地元の方から小林邸の取り壊しの情報を頂き、四月二十三日にまず農具・生活用具類六七点を救出した。中にはあまり現存していない踏み車があった。明治十八年の墨書銘もある貴重なもので、史料館再開にあたって二階奥の部屋のメイン展示品とした。さらに二十六日の再訪問で、屋根裏から近世の大坂市中の古絵図や昭和戦前期の本山村議会史料など、計一七四点の近世近代史料を救出した。これは和歌山県立文書館の好意によって熏蒸処理が行われた。

このころから史料ネットは、既調査史料や情報の寄せられた史料の救出だけではなく、地域を巡回して史料保全のお願いと安否確認、必要なら史料救出を行う方向へと動いた。その全容についてはいずれ史料ネットが詳細な報告書をまとめる予定で、当面は注(3)の文献を参照願いたいが、私は宝塚市の担当となり佐賀朝氏（大阪市立大学大学院）の統括のもと、市南部全域の巡回調査と史料救出を行った。米谷地区の和田家文書[4]のように、質、量とも市内で最高の史料群がみつかり、緊急整理も行われた。神戸市域の巡回調査は神戸大学が中心になり、適宜、道谷卓・藤川祐作・望月浩・望月友二と私の五館員が加わって救出活動を行った。具体的には御影本町の山本家（七月一日、六点）、森北町の藤本家[5]（九月九日、八〇点）である。いずれも神戸大学が文献類を回収したのに対し、史料館では民具や農具を回収した。このうち藤本家からは戦時下の隣保組織を歌った国民歌謡「隣組」の歌詞を刷り込んだ大政翼賛会の湯呑茶碗を救出し、再開の企画展で展示されている。このほか、史料館に直接情

報のあったものとして、走尾家があり、藤川研究員が生活道具二六点救出した（八月五日）。民具類の救出は自治体も大学も、尻込みしがちなため、意識して積極的に回収した。それは史料館の特色であると同時に、生活史の復元・研究はモノと文献の双方が必要であることを強調したかったためでもある。

課題と展望

以上のように史料館の史料救出は、史料ネットの活動を支え、または補完する形で、自治体の行政区域を越えて行った。あくまで補完で成果は限定され十分とはいえない。立上がりが早ければ、もっと史料は救出できた。また今となっては、史料ネットの補完ではなく、独自に巡回調査をするなどより主体的な活動をすべきだったと思う。ただ一連の活動を通じて感じたのは、歴史学が民衆から遠く掛け離れていると批判されて久しいが、史料救出と保存も地域密着が重要であることである。

たとえば、史料ネットが最初に史料救出を行うのは二月十三日であり、地震発生より一か月を要した。それは研究者側に「こんな非常時に史料救出を話題に出せば被災者から批判を浴びる」という躊躇があったことも一因であった。しかし、史料館にはそれ以前に史料救出依頼が来ていたのであり、被災市民の中に史料救出の要望があったことも事実である。またこれは伊丹市での事例だが、郷土史家といわれる地域の研究者が、顔見知りの旧家を見舞いを兼ねて訪問し、多くの史料を救出した。東灘区本山北町の小林家の史料救出では、最初に情報をもらった段階では史料館として対応ができるか微妙で、史料ネットの連絡先を伝えたが、史料ネットには相談が行かず、史料館の動きを待っていたという事例もあった。

住民意識としては、やはり他の自治体や大学など専門機関には飛び込みでは相談しにくいという心理が働くのではないかと思う。地域に密着しつつ大学など専門機関と連携を保った活動の重要さ、そして日常活動の積み重ねこそが、危機状況で生きてくることを改めて痛感した。それは今後の活動の在り方、史料館運動、ひいては歴史学はどうあるべきかという問いにもヒントを提供するだろう。

なお館員が集まれないような初期の段階で、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（略称・全史料協）が関東からも史料館の様子を見にきて頂き、お見舞いや整理のボランティアの申し出をいただいた。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

(1) 奈良大学保存科学研究室「阪神・淡路大震災被災文化財リスト」（日本文化財科学学会『会報』一九）、日本建築学会近畿支部『阪神大震災歴史的建造物被災調査報告』など。

(2) 福祥寺「当山暦代」（『歴史と神戸』六七）。

(3) 阪神大震災対策歴史学会連絡会『阪神・淡路大震災　歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム記録集』、藤田明良「阪神淡路大震災と歴史資料救出活動」『日本史研究』三九二～三九四、辻川敦「阪神・淡路大震災による歴史資料の被災と救済活動」『歴史学研究』六七五、佐賀朝「阪神大震災による被災歴史資料救出の活動について」『関西司法研究会ニュース』八、同「阪神・淡路大震災による被災歴史資料救出の活動」『歴史評論』五四二、森下徹「阪神大震災による被災歴史資料とその救出活動」『地方史研究』二五五、武田信一「淡路島における被災文化財の救出について」『同』二五六、見城悌治「被災地における『歴史と文化を生かした街づくり』とは」『同』二五七、大国「被災史料の救出と史料保存をめぐって」同。また尼崎市立地域研究史料館『地域史研究』七三が特集を組み詳細な文献目録を掲載している。(4) 一九九五年九月二一日付の神戸、毎日、読売、産経の各紙朝刊、同三〇日付朝日新聞朝刊。

(5) 神戸新聞一九九五年九月十三日付朝刊。

神戸市東灘区旧本庄村の地蔵盆について

史料館主任研究員　望月　浩

一、はじめに

去る一九九五年一月十七日に、神戸阪神地方を中心に大規模な地震がおそった。神戸深江生活文化史料館の付近も多くの家屋が壊れ、多数の尊い人命が失われた。亡くなられた方にはお悔やみを申し上げ、被災された方には心よりお見舞い申し上げます。

今回報告するのは、旧本庄村の民俗調査の一貫で、一九九四年の八月二十三、四日に行った地蔵盆の実態調査を行った結果である。多くの民俗的行事が市街地で消えていく中で、この地蔵盆の行事は、比較的地元の人々に密着した形で行われていた。

なお、各地蔵の祭祀物の形態については、本誌十九号の拙稿「神戸市東灘区深江地域の路傍の石造遺物調査報告」を参照していただきたい。

二、旧本庄村の歴史的概観

旧本庄村は現在の行政地名でいうと、神戸市東灘区本庄町・深江北町・深江本町・深江南町・本山南町・北青木・青木にあたる。近世には、西から西青木・青木・深江の村々があった。そして青木・深江の村は、森・中野・小路・北畑・田辺（いずれも現神戸市東灘区）・三条・津知（いずれも現芦屋市）とともに本庄九カ村と呼ばれていた。西青木は、岡本・野寄・田中・住吉・魚崎・横屋（いずれも現神戸市東灘区）とともに、山路庄と呼ばれていた。元和元（一六一五）年には尼崎藩領になり、その後、明和六（一七六九）年に天領になった。近代に入り、明治二十二年四月一日に本庄村が成立した。昭和二十五年十月十日に神戸市に合併し、東灘区の一部となって現在に至っている。

各村（西青木・青木・深江）それぞれ鎮守社があるが（西青木－春日神社、青木－八坂神社、深江－大日霊女神社）、さらに広い地域的連携の神社がある。西青木は住吉神社の氏子地で、青木・深江は近代にいたるまで稲荷神社と保久良神社の氏子地であった。しかし、明治五年にどちらかの氏子地を選ばなければならなくなり、青木と深江は稲荷神社の氏子地となった。

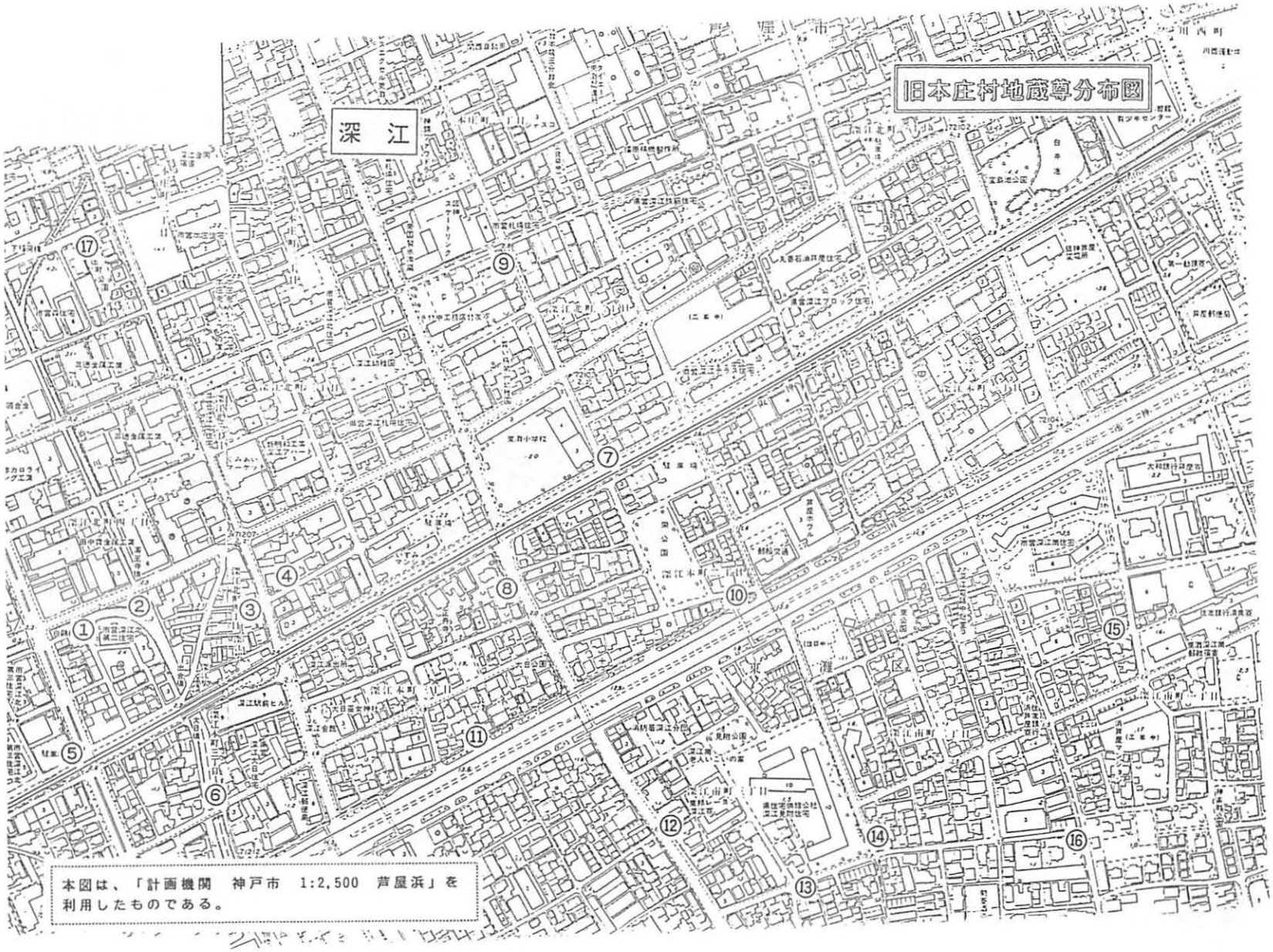
寺は各村に1カ寺ずつあり、（西青木－西林寺、青木－無量寺、深江－正寿寺）であるが、いずれも浄土真宗である。

各村とも戦後は市街地化しているが、戦前は西青木は農業、青木・深江は漁業が主な産業の村であった。現在は農業・漁業ともほとんど見られない。

三、深江地区

①　本王寺地蔵

＜所在地＞深江北町四丁目五　白鷗橋のすぐ東、高橋川南。南向き。**＜管理者・世話人＞**自治会で管理・世話をしている。**＜祭祀物の形態＞**地蔵石仏2基。**＜付属施設＞**木製祠。**＜御利益＞**子供の無病息災。**＜祀られた時期といわれ＞**川から流れてきた物を祀ったといわれている。**＜地蔵盆の様子＞**提灯で飾り付けをし、お供えをする。小さい縁日風の店を近所の人が出して、子供を喜ばせる。盆踊りをした年もあった。※この地蔵さんについては、森尚美氏の調査による。


旧本庄村地蔵尊分布図
深　江
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
本図は、「計画機関　神戸市　1:2,500　芦屋浜」を利用したものである。

旧本庄村地蔵尊分布図
西青木
青木
①
②
③
④
⑤
(1)
(2)
(3)
(4)
本図は、「計画地図　神戸市　1:2,500　青木」を利用したものである。

地蔵盆は子供が主役（深江地区No.①）

② 名称は特になし

＜所在地＞深江北町四丁目七　高橋川と要玄寺川の合流地点北側。北向き。＜管理者・世話人＞近所の人十人ほどで世話をしている。深江市場の人が多い。＜祭祀物の形態＞仏像が陽刻された板碑1基と一石五輪塔2基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞商売繁盛。＜祀られた時期といわれ＞五十年くらい前に祀られたという。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。二十四日の晩の七時から九時まで盆踊りをする。祠前が小さい広場になっている。特に決まった曲はなく、アニメなどを主体に音楽をかける。二十三日には五、六人の人が御詠歌をあげに来ていた。数珠繰りは行わない。＜話者＞奥隅氏。

③ 延光地蔵尊

＜所在地＞深江北町四丁目八　阪神電車深江駅北、稲荷筋から西へ路地を入ったところ。東向き（元は南向き）。＜管理者・世話人＞建部家で主に管理。関山（元建部家の娘）・阿比留・建部・清水氏ら近所の主婦で世話。＜祭祀物の形態＞地蔵石仏1基。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞子供の病気。＜祀られた時期といわれ＞元はすぐ北側に南向きに所在していた。平成二年四月に移動。地蔵は南か東向きが良いといわれているので、東向きになる。その前は川沿いにあったものを話者（昭七生）の父が拾ってきて祀ったのが始め（昭和初め頃か）。昭和十一年八月の字が書かれた賽銭箱あり。空襲の時も、地蔵さんのご利益か、付近は焼け残ったという。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。二十四日の朝には、御詠歌をあげに十人ぐらいが回ってきた。一昨年（一九九三）は垂水から一人だけ来た。今年は（一九九四）来ない。数珠繰りは話者の子供の時に一度だけしたことがある。昭和二十五、六年ぐらいまで、盆踊りをしていたことがある。大阪の松屋町までおもちゃを買っ

てきて子供らに配る。他にお菓子もお下がりとして配る。一軒ずつ精霊をそれぞれの家にかけていたこともある。＜話者＞関山・阿比留・建部氏

④　名称は特になし

＜所在地＞深江北町三丁目四　阪神電車深江駅北、稲荷筋から東へ路地を入ったところ。南向き。＜管理者・世話人＞難波家で管理。世話も主に難波家でしているが、地蔵盆などの時には、近所の人も手伝ってくれる。＜祭祀物の形態＞完形の一石五輪塔1基と空風輪のみの一石五輪塔1基。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞いろいろ。＜祀られた時期といわれ＞難波氏は土建会社を営んでいて、五十七、八年前に、向かって左側の完形の一石五輪塔を、高橋川の工事中に拾いあげた。そして三年後には、空風輪だけの一石五輪塔を拾いあげた。最初は自宅の庭で祀っていた。戦時中には一緒に疎開もしていた。十年ほど前（昭和六〇ごろか）から現在の地へ祀るようになった。＜地蔵盆の様子＞昔は数珠繰りをしていたこともある。大師講で御詠歌をあげる人が毎年来ていた。今はテープをかけている。子供らにはお供えのお下がりを渡す。提灯で飾り付けをし、お供えをする。＜話者＞難波氏。

⑤　不明

＜所在地＞深江北町五丁目二　阪神電車深江駅西の踏切の北西角。東向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞地蔵座像石仏1基。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞不明。＜地蔵盆の様子＞特に何も行わない。

⑥　踊り松地蔵

＜所在地＞深江本町三丁目四　旧浜街道と高橋川の交差するところ、北東角。南西向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞地蔵立像石仏1基と一石五輪塔49基（残欠含む）。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞付近に散在していたものを、今のように集めたと言う話と、高橋川の改修工事の時に出土したものを祀った、という話が残っている。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。

⑦　名称は特になし

＜所在地＞深江北町二丁目一　東灘小学校南東角、阪神電車線路沿い北側。東向き。＜管理者・世話人＞近所の家十一軒ほどで世話をする。＜祭祀物の形態＞光背を備えた阿弥陀如来座像1基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞昭和五〇年頃、現在地より東の踏切の少し南で、下水道工事をしているときに、出土した。その後地鎮祭をしてもらい、現在地へ祀られる。拝んでくれた霊験のある人は、「この仏は芦屋城のふもとに道標として祀っていたもので、六百年ぐらい前の物。それが流されてきた」と言い、「隣保全体で祀ってください」と言った。最初出土した時はただの石柱であったが、だんだんと輪郭が出てきて、今のような仏像が浮かび上がってきた。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。五、六人で御詠歌をあげる（深江南町付近の人）。二十三・二十四日の晩に子供たちにお下がりを配る。

⑧　北の地蔵さん

＜所在地＞深江本町三丁目七　通称札場筋沿いの西の歩道上。東向き。＜管理者・世話人＞磯野家で管理・世話。近所の人も世話をする。＜祭祀物の形態＞石仏1基、一石五輪塔5基、反花のある基壇1基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞交通事故にあわない。子安地蔵。＜祀られた時期といわれ＞「北の地蔵さん」とは、昔、現在地付近が集落の一番北の端であったので、そう呼ばれていた。最初は西向きであったが、道路（札場筋）が広がったため

東向きに変わった。石仏は戦災の時に首が落ちたので、戦後つけ直した。祠内の一つか二つは、高橋川から持ってきたという。一番古いのは石仏。磯野家では屋敷内で稲荷さんを祀っていたことがあるが、その時のご神体の一石五輪塔2基を、今の祠内に同居させた（祠内向かって右の奥の2基）。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。小さいお膳に、ご飯・漬物・ふ・なす・ピーマンなどを盛り付けして供える。昔は数珠繰りをしていた（大正・昭和初期のことで、戦後は行っていない）。数珠は磯野家で保管していたが、筆者の調査時に神戸深江生活文化史料館に寄贈。子供も大人も混じって行われていた。その時に御詠歌はあげなかった。盆踊りもしなかった。お供えをしてくれた人には、お下がりを二十四日の午後に配る。子供らには、二十四日夕方七時頃までにお下がりを配る。四人一組で御詠歌をあげにくる人がいた。昨年（一九九四）は来なかった。＜話者＞磯野氏。

⑨　北町地蔵

＜所在地＞深江北町二丁目十　本庄町中公園南路地入口。北向き。＜管理者・世話人＞近所の人で世話・管理。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔2基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞提灯には「北町地蔵」と書かれているが、特に名前はないという。元はこの付近は、札場という地名であったので、「札場地蔵」と呼んだこともあった。昭和二十七年頃に、近くの人が、深江の浜に打ち上がっているのを拾いあげて、祀ったといわれている。また、踊り松地蔵から譲ってもらったという話も残っている。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。提灯には新しく子供が生まれた家が、その子供の名前を書いて奉納する。毎年そのままその提灯は、地蔵盆の時にはぶら下げられる。中には二〇年間ぶら下げられているものもある。二十三・二十四日には、お下がりを子供らに配る。以前は祠の路地奥（西側）でやぐらを組んで、盆踊りや仮装大会を行っていた。二、三年前までは、祠のすぐ前の道路で子供らが盆踊りをしていた。数珠繰りも行っていた（五、六年前まで）。数珠は保管されている。数珠繰りは、御詠歌をあげながら、子供も大人も混じって行われた。回しているときに大きい玉が自分のところにくると、その玉を体の悪いところに当てた。また背中に指圧のような感じで押し付けたりもした。

⑩　辰巳地蔵尊

＜所在地＞深江本町二丁目三　栄公園の東、浜街道が国道四十三号線に合流するところ。南向き。＜管理者・世話人＞近所の人十人ぐらいで世話。毎朝水や花を代えている。世話人の中心は天王寺谷氏。＜祭祀物の形態＞阿弥陀如来座像が陽刻された板碑1基、光背を備えた阿弥陀如来石仏が6基、一石五輪塔が3基、地蔵石仏が1基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞何でも聞いてくれるので遠方からも参る。この辺りは事故がおきない。＜祀られた時期といわれ＞百年以上も前からあるといわれている。元は栄公園の西にあった。浜街道沿い北側にあったが、道路が拡張されて道の真ん中に残されたため、昭和五十五年十二月二十一日に現在地へ移動した。新しい地蔵石仏1基は、深江本町の塞の神の隣にあったもので、塞の神は大日霊女神社に合祀され、平成五年一月三十日に地蔵石仏は現在地へ移動された。＜地蔵盆の様子＞昔は、盆踊りや数珠繰り（子供だけ）をしていた。今は、提灯（子供の名前が書かれている）で飾り付けをし、お供えをする。お供えはお下がりとして子供らに配る。昔のお下がりは芋や豆であった。御詠歌を浜の方からあげにくる人がいたが、昨年（一九九四）は来ず。数珠は神戸深江生活文化史料館に寄贈。＜話者＞天王寺谷氏。

⑪　不明

＜所在地＞深江本町三丁目一　大日公園南西の国道四十三号線北側。南向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞長足形の一石五輪塔の地輪部の上に地蔵石仏の頭部1基と姫神像1基。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞不明。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。

⑫　福徳地蔵尊

＜所在地＞深江南町三丁目四　国道四十三号線南の通称札場筋東沿い。西向き。＜管理者・世話人＞普段は、小林・中本・中西家で世話・管理。地蔵盆の時には近所の人も世話をする。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔5基、光背を備えた石仏2基、仏像が陽刻された一石五輪塔の地輪部1基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞何でも聞いてくれる。いろいろ。＜祀られた時期といわれ＞いつ頃からかわからないが、昭和初期以前からは祀られていた。戦後、すぐ北のせんたく屋さん付近から移動した。土中からでてきたとも言われている。さまざまな困苦から人々を救ってくれるので、福徳地蔵尊と呼ばれるようになった。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。提灯は子供が生まれた家から奉納される。お供えは、昔は品物だったが、今はお金が多くなった。昔は数珠繰りをしていた。御詠歌をあげに、深江の人二人、他地区の人（元は深江に住んでいた）一人が、毎年来ていた。昨年（一九九四）は来ず。二十四日にはお下がりを子供らに配る。数珠繰りの数珠は三木さんが持っていた。＜話者＞小林・中本氏。

⑬　塩崎さん

＜所在地＞深江南町三丁目一　公衆電話の横。北西向き。＜管理者・世話人＞塩崎家で管理・世話。＜祭祀物の形態＞地蔵石仏1基。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞子供の無病息災。＜祀られた時期といわれ＞塩崎氏の先代は漁師で、イカナゴの加工をしていた。元々、塩崎家の中で地蔵さんを祀っていたが、昭和二十五年頃に外に出して祀るようになった。先代が車から落ちたことがあったとき、地蔵も割れていたという。地蔵さんをつくったのは、昭和初めともいわれている。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。毎年御詠歌をあげにきてくれるが、昨年（一九九四）は来ないのでテープを流す。

⑭　延命日切地蔵尊

＜所在地＞深江南町二丁目五　見附住宅東。西向き。＜管理者・世話人＞冨松家が管理・世話。岩井家（前の管理者）の娘さんも世話をする。＜祭祀物の形態＞光背を備えた定印阿弥陀如来座像1基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞日切りをするとよく聞いてくれる（特に受験など）。＜祀られた時期といわれ＞戦後、五十年くらい前、岩井さん（前の管理者）の両親が山にあったものを持ち帰ったといわれている。冨松家は三十年ほど前から管理するようになった。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。毎年御詠歌をあげにきてくれる。今年（一九九四）は来ない。丸尾さんという人で、「導士」と呼んでいた。坂上の奥さんという人？もいた。※⑭から北へ上がり、三叉路を東へ少し行ったところに、五年程前まで地蔵さんが祀られていた。町内で盆踊りも行われていた。世話人が亡くなってから、無縁墓地（本庄共同墓地か？）へ持っていった。＜話者＞冨松氏。

⑮　不明

＜所在地＞深江南町一丁目十四　南向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞仏像が陽刻された長足形の一石五輪塔の地輪部。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞不明。＜地蔵盆の様子＞お供えをする。

⑯　名称は特になし

＜所在地＞深江南町二丁目二　神楽橋跡の碑より南西、伊丹氏宅塀の中。北東向き。＜管理者・世話人＞八木さんという人が世話。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔1基。空輪が欠け、別石の空風輪を据える。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞不明。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。

⑰　延光地蔵

＜所在地＞本庄町三丁目六　本庄町公園北側入口入ったところ。北向き。＜管理者・世話人＞近所の人が世話。坂本・清水・まさのぶ・こうだ・西垣氏ら。稲荷筋自治会の提灯あり。延光地蔵尊保存会などもある。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔13基、長足形一石五輪塔14基、光背を備えた石仏7基、石標1基、その他2基。＜付属施設＞コンクリートと木でできた祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞昭和十四年の区画整理（地蔵の所在する本庄町公園内に整地記念碑あり）の時に、高橋川の堤防付近から出土したといわれている。本庄町公園は元々池で、昭和十四年の区画整理の時と思われる頃に、埋め立てられた。回りはいちじく畑であった。池の東側には土手があり、そこは戦後の昭和二十二年頃戦後住宅？が建てられた。そして付近も改修した。その頃は地蔵さんも南向きに所在していて、昭和四十年頃今のような北向きになった。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。数珠繰りはしない。御詠歌は自己流であげる。二十三、四日は晩七時半から十時頃まで盆踊りをする。公園内にやぐらを組み、踊りの会の人が中心になって、アニメや炭坑節などをかけて踊る。子供らはお参りをすると、キャンデーなどがもらえる。

地蔵盆での盆踊り（深江地区No.⑰）

四、青木地区

(1) 延命地蔵

＜所在地＞青木五丁目一　国道四十三号線北側。南向き。＜管理者・世話人＞二口・寺田・中村・藤原・畑氏の五人の近所の人で世話。＜祭祀物の形態＞地蔵石仏7基、一石五輪塔22基、石仏8基。＜付属施設＞コンクリート製のお堂。＜御利益＞いろいろ。足の不自由な人が参ると歩けるようになったのが、この地蔵の霊験あらたかの初め。＜祀られた時期といわれ＞戦前からある。東の地蔵尊と言われていた。各所の石仏・五輪塔が集まってきた。元々の物は、上の段の地蔵石仏だという。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。小さいお膳に、赤飯・お豆さん・ひじき・奈良漬け・里芋などを盛り付けして供える。堂内には、古くからある地獄の絵が描かれた掛け軸を掲げる。二十四日の夕方、四時半頃から堂前で数珠繰りを行う。真ん中に世話人2人が座り、御詠歌のテープを流しながら、鐘をたたく。その回りで子供たちが数珠を回す。昔は屋

数珠繰りに使われた数珠（青木地区No.(1)）

子供たちが輪になって数珠繰りをする（青木地区No.(1)）

台を組んで盆踊りをしたり、御詠歌踊りもしていた。

＜話者＞二口・寺田・中村・藤原・畑氏。

(2)　三体地蔵尊（提灯に書かれた文字より）

＜所在地＞北青木三丁目五　北青木児童館の北の道を東に行き、岡本屋酒店のすぐ西の路地を南へ下がったところにある。東向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔2基、阿弥陀如来座像を陽刻した長足形一石五輪塔の地輪部1基、阿弥陀如来座像石仏2基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞戦前からある。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。

(3)　延命地蔵

＜所在地＞青木二丁目十一　大共ビル前。南向き。＜管理者・世話人＞管理は山本貞子氏、世話は山本千春・東野まりこ氏他。最初は

お供えされたお膳（青木地区No.(3)）

一人で世話をしていたが、町内の人に呼び掛けて世話を手伝ってもらっている。＜祭祀物の形態＞光背を備えた阿弥陀如来座像1基。＜付属施設＞木製の祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞設置時期は不明。土の中に埋まっていたという。元々は山本家の中で祀っていたもの。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。小さいお膳に、ご飯・奈良漬け・豆腐の味噌汁・お豆さん・こんにゃく・枝豆・里芋を盛り付けし、供えている。七年前にみんなで祀りだした。現在は二十四日に寺の人が来るのと、お下がりを子供たちに配る程度。昔は、数珠繰りや御詠歌をあげた。数珠繰りは、真中にお婆さんが座り、御詠歌をあげる。その回りを数珠を持った子供たちが輪になるというものである。また、スイカ割りをしたり、すし・おにぎりを作って子供たちに食べさせたりした。提灯ももっと飾っていたのだが、三、四年前頃、近くのマンション工事のため、ダンプカーが前の道を通るようになり、道が狭くなったのでやめた。＜話者＞山本千春・東野まりこ氏。

(4)　秋田地蔵尊（昔は西の地蔵堂と呼ばれていた）

＜所在地＞青木五丁目四　西向き。＜管理者・世話人＞昔は西の町内会で世話をしていたが、現在はすぐ横の住田家で管理・世話をしている。＜祭祀物の形態＞舟型光背を備えた石仏1基（阿弥陀如来か）。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞願い事は何でもよく聞いてくれる。＜祀られた時期といわれ＞浜街道を天井川から少し東へ入ったところから、南へ下がったところのたんぼの用水路で、住田氏のおばあさんらが洗濯をしていたところ、うつぶせになっている石を見つけた。ひっくりかえしてみると、仏さんが彫ってあるので、持って帰って祀るようになった。元は国道四十三号線南側にあったが、昭和になってから地蔵のあった家が売られたので、現在地へ移動した。他の地蔵と一緒に祀ると嫌がるので、1基だけ

で祀っている。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。昔は御詠歌をあげていた（四十三号線の南にあった頃）。数珠繰りもしていた。数珠は住田家で保管している。＜話者＞住田氏

五、西青木地区

① 不明

＜所在地＞北青木四丁目四　奥野家と駐車場の間　南向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔1基（地輪に仏像が陽刻されている）。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞不明。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。

② 本町地蔵

＜所在地＞北青木四丁目四　阪神電車青木駅西の踏み切りを北に上がり、駐車場北側。北向き。＜管理者・世話人＞須藤・美濃部・入沢・西垣氏ら近所の人6人で世話。1ケ月毎に花や水の世話の当番を決めている。＜祭祀物の形態＞舟形光背を備えた阿弥陀如来座像1基と仏像が陽刻された一石五輪塔1基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞願い事をよく聞いてくれる。＜祀られた時期といわれ＞元々は、道を挟んですぐ北の三好家にあったという。戦前から現在地にあったが、いつ頃からかはわからない。現在地のすぐ東の道路上に、セメントの跡が残っている。ここに建っていたが、道路が拡張されたので、少し西に移動した。空襲でも焼けなかったという。北向き地蔵なので、位が高いといわれている。＜地蔵盆の様子＞提灯で飾り付けをし、お供えをする。近くに会社が多いので、お供えの件数・金額が多い。子供らにお下がりを配る。道を通る子供にもあげている。近くのお寺さん（西林寺）が二十四日に参る。数珠繰りは行ったことがない。昔は子供らが地蔵の前で勝手に踊っ

一般的に見られる飾り付けの様子（西青木地区No.②）

ていた。地蔵の屋根に付けるやぐらがあった。＜話者＞須藤・美濃部・入沢・西垣氏。

③ 川地蔵尊

＜所在地＞北青木四丁目三　阪神電車青木駅西側を流れる、天上川に架かる西ノ坪橋東詰、阪神電車線路沿い北側。東向き。＜管理者・世話人＞式見氏が管理・世話。＜祭祀物の形態＞一石五輪塔7基。＜付属施設＞コンクリート製の祠。＜御利益＞いろいろ。＜祀られた時期といわれ＞三〇年程前に、式見氏がここに来てから祀りだした。すぐ西側を流れる天上側の川底掃除の作業をしていた人が、川底から1体ずつ引き上げて、その都度現在地のすぐ南の草むらに置いていた。これを7基、式見氏が現在のように祀るようにした。「川地蔵尊」はこのことから式見氏が名付けた。＜地蔵盆の様子＞二十三日に無量寺のお坊さんが参ってくれる。人通りが多く、参る人も多い。一人で世話をしているので、体の元気な一昨年（一九九三）までは、提灯で飾り付けをし、お供えもしていた。＜話者＞式見氏。

④ 不明

＜所在地＞北青木四丁目十一　西林寺の東路地奥。西向き。＜管理者・世話人＞不明。＜祭祀物の形態＞長足形の一石五輪塔の地輪部（阿弥陀如来像陽刻）1基、一石五輪塔1基、光背を備えた阿弥陀如来座像1基、舟形光背を備えた地蔵石仏1基。＜付属施設＞木の屋根囲い。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞不明。＜地蔵盆の様子＞特になし。

⑤ 不明

＜所在地＞北青木四丁目十八　春日神社の南の道路を少し東へ行ってすぐ北側。西向き。＜管理者・世話人＞紙谷家。＜祭祀物の形態＞地蔵石仏座像1基。＜付属施設＞木製祠。＜御利益＞不明。＜祀られた時期といわれ＞紙谷家のおばあさんが、生前祀ったもの。昭和三〇年頃という。＜地蔵盆の様子＞特になし。＜話者＞福井氏。

六、旧本庄村の地蔵盆の特徴

・期日は、八月二十三日と二十四日の二日間で、二十三日は宵、二十四日が本祭りである。
・地蔵盆の期間中は、提灯で飾り付けをし、お供えをする。
・子供たちを対象とした祭りである。
・八月十五日のお盆とは別の行事である。
・愛宕信仰とは関連性がない。
・農業・漁業といった産業とは関連性がない。
・御詠歌（他の人に頼む）をあげるところが多い。
・お寺さんにきてもらうところがある。
・特別なご利益のお地蔵さんは見当らない。
・一石五輪塔や阿弥陀如来などもすべてお地蔵さんとして祀っている。
・実際に地蔵を祀っているものを見ると、近代になってからの物だけである。
・土の中から出土したものを祀っているもの（一石五輪塔・阿弥陀如来石仏）が見られる。おそらく川の氾濫などで、流されてきたものと思われる。
・数珠繰りをするところも見られる。百万遍という言葉は聞かれない。
・盆踊りも数カ所行われている（かつては行っていたところもある）。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた方々にお礼を述べるとともに、震災のお見舞いを重ねて申し上げます。

『生活文化史』総目次

創刊号～第二〇号

◇**創刊号（一九八一・四・一）8P**

・開室にあたって　太田垣正雄

ほか新聞記事より

◇**第2号（一九八二・二・二一）8P**

・埃まみれ　深山　健二

・深江の歩みと街かどの史跡　田辺　眞人

・史料紹介(一)　兵庫県運上所の積出し許可状二通について　長岡　暁子

・展示品との対話―見学者のおたよりから

史料室所蔵の砲銃弾について　土居　一郎

旧深江だんじりの撞り鐘　鈴木　武

・史料室友の会の一年　門前　喜康

・史料室の一年と資料提供の方々　赤松　豊子

◇**第3号（一九八二・七・二一）8P**

・町かど歴史博物室の五百日　田辺　眞人

・生活の歴史のミニ博物館　長岡　暁子

・農村の生活と六甲山系の雨乞い　田辺　眞人

・展示品との対話(二)　史料室所蔵の陶磁器について　広岡　俊二

・史料室友の会のあゆみと展望　小嶋　悦廊

・二年目に入った史料室　赤松　豊子

・はじめまして！　谷口美登里

◇**第4号（一九八二・一〇・一〇）8P**

・身近かな歴史の博物館―中央アジアの夏の旅から―　田辺　眞人

・ふるさと深江の歴史　田辺眞人・長岡暁子

・楽しかった野外映画のつどい　佐野　末夫

◇**第5号（一九八三・二・二一）8P**

・開設二周年に当って　太田垣正雄

・条里制研究からみた深江　落合　重信

・増築計画と今後の運営　田辺　眞人

・聞き書き調査に当って　望月　浩

・史料室から　赤松　豊子

◇**第6号（一九八四・二・二一）12P**

・生活文化史料館拡張再開館　田辺　眞人

・深江と商船大学海事資料館　杉浦　昭典

・史料に読む深江の歴史(一)　検地帳から　広がる水田、さかんな開発　児玉　昌巳

・展示品との対話(三)　打出焼について　望月　浩

・近隣の資料館をたずねて　渡部　永子

・聞き書き調査から　伊東　玲子

・史料館友の会活動　小嶋　悦廊

◇**第7号（一九八五・一〇・三〇）12P**

・幕末・維新史のひとこま　戊辰戦争と深江の漁師　太田垣正雄

・太平洋をかこむ国々と日本を語る　山本　文雄

・地域の生活誌(一)　深江の民俗から―その一―　望月　浩

・史料に読む深江の歴史(二)　史料館所蔵・永田家文書から　年季奉公人請状之事　広岡　俊二

・展示品との対話(四)　灘の新聞　西摂新報　柏原　正民

・研究会活動のご案内　伊東　玲子

・史料館日誌抄　川口さつき

◇**第8号（一九八六・九・六）12P**
・摂津の考古学からみた東灘(一)　森岡　秀人
・深江北町遺跡の発掘調査　山下　史朗
・埋蔵文化財に地域の関心を　佐野　末夫
・「時代を語る写真」眠っていませんか？　史料館調査研究委員会
・史料に読む深江の歴史(三)山論の訴状から　山野をめぐる本庄・芦屋・西宮の農民たち　大国　正美
・展示品との対話(五)　農具―その一―　望月　浩
・史料館日誌抄　川口さつき

◇**第9号（一九八七・四・一九）12P**
・開館六周年を迎えて　太田垣正雄
・郷土玩具に見る生活文化史―特別展によせて―　道谷　卓
・深江北町遺跡円形周溝墓群模型について　柏原　正民
・摂津の考古学からみた東灘(二)　森岡　秀人
・展示品との対話(六)「電燈案内」～阪神電鉄の電灯電力事業～　山本　文雄
・史料に読む深江の歴史(四)取調書から　天保上知令と摂津の村々　大国　正美
・史料館日誌抄　川口さつき

◇**第10号（一九八七・一〇・一〇）12P**
・魚屋道と出会って　田辺　眞人
・魚屋道あるきながら―コースガイド―　山本文雄・伊東玲子
・新収史料にみる魚屋道の歴史　蕪場としての畑の場の開発　望月　浩
・魚屋道周辺の史跡(一)　神戸女子薬科大学構内古墳　藤川　祐作
・夏の特別展　戦時下の生活文化史を企画して　望月　友二
・史料館日誌抄　川口さつき

◇**第11号（一九八八・四・三〇）12P**
・お手玉遊び　田辺　眞人
・特別展「近代の着物に見る生活史」によせて　伊東　玲子
・展示品との対話(七)　史料館所蔵の唐箕について　望月　友二
・史料館からの手紙　文化財としての郷土玩具　大国　正美
・展示品との対話(八)　史料館所蔵の「寛永通宝」について　道谷　卓
・摂津の考古学からみた東灘(三)　森岡　秀人
・史料館日誌抄　川口さつき

◇**第12号（一九八八・・一一・五）12P**
・摂津の考古学からみた東灘(四)　森岡　秀人
・魚屋道周辺の史跡(二)　神戸女子薬科大学構内古墳(二)　藤川　祐作
・東灘考古学文献目録稿(一)　柏原　正民
・近世の宿駅争論からみる舟坂間道　望月　浩
・史料館日誌抄　川口さつき

◇**第13号（一九八九・八・一〇）12P**
・西岡本遺跡発掘調査中間概要　六甲山麓遺跡調査会
・旧岡本村・井上好太郎家所蔵の資料について　道谷　卓
・摂津の考古学からみた東灘(五)　森岡　秀人
・無量寺に関する伝説　太田垣正雄

◇**第14号（一九八九・一二・三〇）12P**
・史料館所蔵の唐箕について(二)　望月　友二
・東灘考古学文献目録稿(二)　柏原　正民
・史料によむ深江の歴史(五)　天正十七年の芦屋川水論について　大国　正美
・西岡本遺跡発掘調査中間概要2　六甲山麓遺跡調査会
・史料館日誌抄　道谷　卓

◇**第15号（一九九〇・一一・三〇）12P**
・摂津の考古学から見た東灘(六)　森岡　秀人
・西岡本遺跡発掘調査中間概要3　六甲山麓遺跡調査会

◇**第16号（一九九一・一〇・一〇）12P**
・十年の歩みと展望　大国　正美
・深江の漁業について　下久保恵子・望月友二

・神戸女子薬科大学構内古墳(三)　藤川　祐作
・史料館からの手紙　西宮の文字の見えるマンホール蓋　柏原　正民
・覚浄寺の延享三年銘の瓦について　望月　浩
・史料館日誌抄　道谷　卓

◇**第17号（一九九二・六・二八）12P**
・館長就任のごあいさつ　杉浦　昭典
・近世前期の東川用水の慣行と広域調整機構　大国　正美
・深江の漁業について（その二）　下久保恵子
・旧本庄村の道路元標　望月　浩
・むかしのふうけい―国道43号線のできるころ―　道谷　卓
・史料館日誌抄　道谷　卓

◇**第18号（一九九三・三・一）16P**
・左縄と右縄　杉浦　昭典
・近世中後期の水害と幕府の政策　大国　正美
・一時行方不明になっていた道標　望月　浩
・民俗調査に参加して　土居　佳代
・聞き書き調査に参加して　舟橋左斗子

◇**第19号（一九九三・一〇・一五）16P**
・渡部壽さんと史料館運動　大国　正美
・生活文化史料館と父　吉川　永子
・深江の漁具―史料館所蔵の漁具について―　柏原　正民
・神戸市東灘区深江地域の路傍の石造遺物分布調査報告　望月　浩
・わたしの歴史あんない　史料館調査研究会
・史料館日誌抄

◇**第20号（一九九四・一〇・一五）16P**
・再利用された五輪塔―石で出来ているが故の運命―　柏原　正民
・休止中の『友の会』活動再開に向けての検討について（中間報告）
・神戸市東灘区旧本庄村の神社境内にある石造遺物分布調査報告　望月　浩

生活文化史
史料室だより 創刊号 1981・4・1
開室にあたって
日刊スポーツ 56・3・24(火)
ひびき

第１号の表紙

●編者より

今年は、阪神大震災という大きな波に飲み込まれた年でした。史料館は、なんとか再開できましたが、町の様子はまだまだその爪痕が消えていません。しかし、被災した館員も元気に活動していますので、お互いに頑張っていきましょう。

『生活文化史』　第21号　95・12・10
編　集／望月　浩
発　行／神戸深江生活文化史料館
〒658　神戸市東灘区深江本町3―5―7
☎　078―453―4980